

イースターメッセージ

「えっ、こわい」

有住 航 (日本基督教団下落合教会牧師)

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。

(ヨハネによる福音書 20 章 19～20 節、聖書協会共同訳)

イエスの弟子たちは人目を避け、鍵をかけて家に閉じこもっていました。イエスがエルサレムで逮捕され、十字架刑によって殺されてしまったからです。じぶんたちもイエスと同じような目に遭うのではないかと恐れて隠れていた弟子たちのところに突然、十字架で死んだはずのイエスが現れます。おどろく弟子たちにイエスはじぶんの「手と脇腹」を見せるのですが、そこには十字架刑に処される際にできた痛々しい傷跡があったらろうと想像します。弟子たちはイエスを見てよろこんでいますが、復活したことのしるしとしてじぶんの傷跡を弟子たちに見せるという描写はちょっと生々しく感じます。

以前、教会にあつまるこどもたちとイエスの十字架について話し合ったことがあります。イエスが十字架で殺されたことをはじめで聞いたこどものひとりが思わず「えっ、こわい」と言いました。予想外の反応にあわてた大人たちは「大丈夫、怖くないよ」「十字架で死ぬんだけど復活するんだよ」などと伝えるのですが、でも、たしかに、逮捕され、十字架につけられ、釘や槍で刺されて死ぬことはとても怖いことです。「えっ、こわい」という声は当たり前の感想でしょう。大人たちは聖書に描かれている怖さや痛みを受け止めず、たんに復活のプロセスとして素通りしてしまっているかもしれません。こどもたちの方がイエスや弟子たちが経験した怖さや痛みを物語の中からはっきりと聴きとめていたのだと思います。

ひとりのこどもが思わず発した「えっ、こわい」という声は、鈴木侖

子さんの『すべては神さまのプログラム』（新教出版社、2009年）のなかに描かれる丸木俊さんとのエピソードを想起させます。1985年、沖縄で行われたアジア・キリスト教協議会（CCA）の会議に出席した鈴木伶子さんは、画家・丸木俊さんとホテルで同室になりました。丸木俊さんから「神様が地獄に行く話をもう一度してちょうだい」と頼まれた鈴木伶子さんは、イエス・キリストが苦しみを受け理不尽な裁判で十字架刑に処されたことを伝えると、頭をたれて無言でその話を聞いていた丸木俊さんは最後にポツリと「すごい話だ」とつぶやいたというのです。

わたしたちはこどもたちや丸木俊さんのような感覚で、死や痛みや恐怖の出来事と向き合っているでしょうか。イースターはイエスの死と復活を想起するときです。いま世界のあちこちで起きている死と恐怖と痛みの現実に向き合い、そこから発せられる声をたしかに聴きとめ、いのちを脅かす死の暴力に抵抗をつづけたいと思います。共に祈り＝働きましょう。